

「好きだ。大好きだ。」

作西澤尚絃

登場人物
① 永井

② アツシ

③ アサミ

④ ささおか

へ体去月館の裏表

永井「オレ、日取近太^{だざい}幸治^{あさむ}読んでるんだよね。」

アツシ「太幸治の何読んでるんですか？」

永井「人間失格。」

アツシ「人間失格」があれとキツいんだよね。」

永井「何が？」

アツシ「主人公のダメ人間ぶりが。」

永井「麻薬依存症になるところ？」

アツシ「違いますよ。自分の肉太さんが強姦魔に襲われてんのに助けようとしないうところ。」

永井「たしかにね。」

アツシ「先非事はダメ人間にならないうでくださいわね。」

永井「あたりまえだろ。」

アツシ「あゝ早く大人になりたいな。」

永井 「大人になってどうすんだよ。」

アツシ 「いっぱいお金稼いで、たさふく焼肉とかおスシとか食べるんですよ。」

永井 「子供じゃん！子供の考えじゃん！」

アツシ 「だらははははは(笑)。」

ハム(笑)

アツシ 「先非事、好きな人っていますか？」

永井 「いるよ。」

アツシ 「んてマゾッすか？」

永井 「あたりまえじゃん。」

アツシ 「誰？」

永井 「言わないよ。恥ずかしいだろ。」

アツシ 「教えてくださいよう。」

永井 「キキきたい？」

アツシ 「キキきたい！」

永井 「アサミだよ。」

アツシ 「ん？アサミ先非事、すか？」

永井 「フン。」

アツシ 「ちょっと以外なんですけど。」

永井 「フサちゃんカワイイじゃん。」

アツシ 「だっていつも先非事、ブス、ブス！って言ってケンカしてる
じゃないですか？」

永井 「急な情が子供っぽい感じで出ちゃうんだよ。」

アツシ 「そうなんですか。」

永井 「で、お前は誰なんだよ？」

アツシ 「オレ？」

永井 「アツシの好きな人は？」

アツシ 「……」

永井 「おい！何取ずかしがってんだよ！言えよ！（笑）」

アツシ 「マサオ君。」

永井 「は？」

アツシ 「マサオ君が好きなんです。」

永井 「ヤツは男だぞ！」

アツシ 「それでもラブなんです。」

永井「マジかよ？」

アツシ「マジです。」

永井「知らなかったよ。」

アツシ「彼のシユートする次女、カッコイイ。」

永井「じゃあ、じゃあさオレもそういう目で見る時あるの？」

アツシ「無いっすね。先非車は先非車ですもん。」

永井「お、おう。」

アツシ「でも、エリカちゃんも好きですけどね。」

永井「どっちもがよ!？」

アツシ「バイセクシャルな方が人生楽しいですよ。」

永井「同意できないけど、お前がそう言うのであれば。」

アツシ「あ、もうこんな時間だ！」

永井「うお、ドラマが始まっちゃっつよ。」

アツシ「帰りましょう。」

永井「ああ。」

へハム園 ✓ (数年後)

永井 「なんだよアツシ。」

アツシ 「なんだよ。じゃないっすよ。」

永井 「……。」

アツシ 「ききましたよ、おはさんかど。」

永井 「何を？」

アツシ 「会社やめて、無職のままずっと家にひきこもってるっていっ
じゃないですか!？」

永井 「まあ座れよ。」

アツシ 「ええ。」

永井 「ひきこもってるって、ちゃんと外出してるよ。」

アツシ 「いつ何しに？」

永井 「夜、コンビニにマンガが四冊いっ。」

アツシ 「ひきこもりじゃないですかー。」

永井 「だって世の中がコワいんだもん。」

アツシ 「コワ？」

永井 「前行った会社も、その前に行った会社もオレ、ちゃんと働いて
たよ。」

アツシ 「まあ知ってますけど。」

永井 「それなのにな……。」

アツシ 「それなのにな？」

永井 「会社の人、みんな悪口口いっんだよ。」

アツシ 「先非車の？」

永井 「わかんないけど、みんなカゲで人のことよく言わないんだよ。」

アツシ 「はあ。」

永井 「オレに人の悪口口いっうのにな、きくとオレのことにもよく悪く言っうんだよ。」

アツシ 「うん。」

永井 「それで、だんだん周りの人がこわくなっし、しそのまま……。」

アツシ 「何言っしてるんですが先非車!?」

永井 「アツシ?」

アツシ 「社云はそういうもんですよ!」

永井 「……。」

アツシ 「社会はサバんなんですよ。喰ったり、喰われたりなんですよ。」

永井 「うう(泣)」

アツシ 「無菌状態じゃいじめないんですよ！タフにならなま、やですよ！」

永井 「う、う（泣）」

アツシ 「し、かりしてくたさい！」

永井 「う、う（泣）」

アツシ 「オレにとって先非車は先非車なんですが。」

アツシ 「う、う（泣）」

△ へ道端^{みちばた}のゴミ集積所 ✓

アサミ 「ふうん、ふうん（♪）、ふうん、ふうん、ふうん……」

永井 「う、うん、う、うん。」

アサミ 「えー！」

永井 「クサイ、クサイよ。」

アサミ 「ちょっと大丈夫ですか？」

永井 「飛んでる！、ジャケット私飛んでるは！」

アサミ 「あ！、永井君に……」

永井 「あの子を解^とき放^{はな}て！、あの子は人間だぞ！」

アサミ 「何言^いってんのよ。」

永井 「うん、うん。」

アサミ 「起きて、ねえ。」

永井 「うるせー！ エアガンで撃つつぞコノカロリー！」

アサミ 「よいしょ。」

永井 「ふあ？」

アサミ 「これ飲んで。」

永井 「アサミちゃん？」

アサミ 「いりかどこれ飲んで。」

永井 「うん。」

アサミ 「大丈夫？」

永井 「うん。」

アサミ 「どうしたの？」

永井 「お酒、飲んだ。」

アサミ 「うん。見ればわかる。」

永井 「会社にく、会社にく。」

アサミ 「会社？」

永井 「う、き、気持ち悪い。」

アサミ「ちょっと!？」

永井「オエッ。」

アサミ「イヤッ!？」

公園

永井「おとといはホントゴメンなさい。」

アサミ「ま、たくよ。」

永井「ホントありがとう。」

アサミ「どういたしまして。」

永井「恥ずかしい。」

アサミ「もう、アツシ君から聞いたわよ。」

永井「何て?？」

アサミ「永井君がニート野郎でひきこもり中だ。」

永井「あのヤロウ。」

アサミ「彼、心配してたよ。」

永井「そっか。」

アサミ「永井君は考えすぎだよ。」

永井 「へ？」

アサミ 「人生一度しかないの。」

永井 「はあ。」

アサミ 「自分の好きなことしなさい。」

永井 「好きなこと？」

アサミ 「そう。」

永井 「オレ、アマゾンへ行ってピラニアフリだい。」

アサミ 「つりに行けばいいのよ。」

永井 「そんでエジプトへ行って大冒険したい。」

アサミ 「大冒険すればいいのよ。」

永井 「でもお金が……。」

アサミ 「稼げばいいのよ。」

永井 「オレ、遺跡発掘のバイトがしたい。」

アサミ 「や水ばいいじゃない。」

永井 「会社に行かなくてもイイんですか？」

アサミ 「あたり前じゃない。」

永井 「ま、マジで？」

アサミ「マジで。」

永井「好きだアサミ。」

アサミ「オラあー！」

永井「ぐあ。」

アサミ「ちなみに私はプロ格闘家よ。」

永井「なんでも有りなのね？」

アサミ「有りよ。」

へんげ掘現場

ササオカ「コレ、ヤフオクで売ったど入金になるかな？」

永井「ふん、ふん。」

ササオカ「ウチの孫さ、ニオなんだよ。」

永井「ふん、ふん。」

ササオカ「ジョージ、ジョージっしょってきいてカワイイんだ、これが。」

永井「どリヤ、どリヤ。」

ササオカ「オメーも早くヨメさんもらんや。」

永井「よっしっ！でたー！」

ササオカ 「あゝ。」

永井 「ごましたよ、ササオカさん。」

ササオカ 「それ縄文か？」

永井 「縄文、す！」

ササオカ 「記録してもいいや。」

永井 「センサー、写真、お願いしましす。」

先生 「はい。比呂さん、小休止してください。」

アツシ 「あゝ先非車やっってますね。」

永井 「おおアツシ。」

アツシ 「でますか？」

永井 「けっこういい感じ、縄文時代だな。」

アツシ 「今夜メシでもどうですか？」

永井 「いいネ。」

完

アツシ「今夜メシでもどうですか？」

永井「いいネ。」

アツシ「アアミレス行きましようよ。」

永井「ヤッぱサイゼ？」

アツシ「そんなピンポーンが行くようなトコ行きませんよ。
ロイホですよ。」

永井「え、オレ、アソコ好きなんだけどな。まあ、いいけど。」

アツシ「じゃあ、決まりで。」

永井「あ、。」

アツシ「ん、先非事？」

永井「あ、だめだよ、今日ノ。」

アツシ「え？、なんか用事ですか？」

永井「今日、アサちゃんのタイトルル防衛戦だよ。」

アツシ「あ、今日でした？」

永井「そう。」

アツシ「スっがる。」

永井「じゃ、二人で行くか？」

アツシ「そうっすね！」

へ地下闘技場✓

アサミ「ゾー！」

永井「おお！」

アツシ「オあ！」

アサミ「やあ！」

永井「いけアサちゃん！」

アツシ「アサミさん！」

アサミ「たあ！」

永井「そこださ！」

アツシ「そこ、そこ！」

アサミ「とリヤあ！」

永井「よしっす！」

アツシ「ああ！」

アサミ「さ！」

永井「あさ！」

NO.
DATE

アツシ「いいのもどっ、ちゃった！」

アサミ「ハア、ハア、ハア、ハア、くっ！」

永井「ナバイよ！」

アツシ「やめてっ！」

アサミ「負けらんない。負けらんないのよ！」

永井「そこだよ！」

アツシ「ガンバレー！」

アサミ「だっ！」

永井「アサミちゃん！」

アツシ「アサミちゃん！」

アサミ「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア。」

永井「やったっ！結婚してくれアサミ！」

アサミ「ちょっと……ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア。」

△エジプト・ピラミッドの上▽

アサミ「永井君！おそいよ！」

永井「あ、足がさびれるっ！」

アサミ「なさけないわね。」

永井「もうダメ、もうダメ。」

アサミ「ホラ、もう少しだがど。」

永井「アサミちゃん、手えかして。」

アサミ「しょうがないわね、ホラ。」

永井「だりや。」

アサミ「よいしょー。」

永井「ふふ。ふふ。ふふ。」

アサミ「わう、ギザのマチがあんなに小さく見えるー。」

永井「うわ、超言同ケー。」

アサミ「どう？、エジプトは？」

永井「超砂漠だね。」

アサミ「なんなのその威心相心へ笑し。」

永井「ちよっ、とまっしてアツシに自慢するがど。」

アサミ「またそれ？」

永井「アツシ？、へッオレ、エジプト。うん、そう。どらミッドの上。
ああ、大丈夫、写真ととくがど、うん、じゃあね。」

アサミ 「あゝ空が高いわね。」

永井 「だね。」

アサミ 「次はどうするの？」

永井 「サバンナへ行くよ。」

アサミ 「ソアールサバンナ？」

永井 「そう。」

アサミ 「ライオン見たいわね。」

永井 「はは(笑)、アサちゃんらしいね。」

アサミ 「どういふ意味よ？」

永井 「「ガオー」って感じ。」

アサミ 「王様ってこと？」

永井 「まあ、そういうことで。」

アサミ 「ふっ、まあ行くわよ。」

永井 「え!? もう!？」

アサミ 「私に続け！」

永井 「ちよ、はやいって!!」

アサミ 「あはははははは……(笑)」

完

アツシ 「ウチの弟、かわってんですよね。」

永井 「タッちゃんか？」

アツシ 「そうタツヨシ。」

永井 「どのへんが？」

アツシ 「オフクロのこと、ママって呼ぶんですよ。」

永井 「へー。」

アツシ 「オレも、兄貴も、ガーちゃんって言うのに。」

永井 「小三だろ？ 普通じゃないの？」

アツシ 「昨日、あいつとケンカして、あいつの二豆チンコ攻撃したんですよ。」

永井 「何してんだよ、弟に。」

アツシ 「そしたとあいつ、そうとー痛、たどしくて、ちくしょー！ ママに
いいつけてやるー！ って涙目で台所に走っていきました。」

永井 「そりゃ、そうだよ。」

アツシ 「オフクロがダビンタですよ。」

永井 「ザ・兄弟ゲンカだな。」

アツシ 「あー早く大人になりたいなく。」

永井 「大人になっ、てどうすんだよ？」

好きだ。
大好きだ。

P2+P1

アツシ 「いっはいお金稼いで、サイゼリアのメニュー全部食べるんで
すよー」

永井 「喰いモンじゃん！喰いモンばっかじゃん！」

アツシ 「だろはははは(大笑)」

『好きだ。大好きだ。』